

19世紀中葉イギリスにおける温室の社会的意義

——キュー植物園のパーム・ハウス（1848）建設を通して——

芝 奈 穂

はじめに

本稿は、ロンドン郊外のキュー植物園（Royal Botanic Gardens, Kew）内に、1844～1848年に建設され、当時、国内で最も有名であった温室パーム・ハウス（Palm House）を取り上げ、19世紀イギリスにおける温室の発展の経緯とその社会的意義を論じるものである。キュー植物園は2003年に世界遺産に指定された名立たる植物園であり¹⁾、パーム・ハウスは現在もその中核を担っているが、本稿では、その建設当初、いかなる社会的重要性を有したかについて焦点を絞って考察する。19世紀は技術革新と工業材質の発展から、ガラスが建築資材として使用可能となり、鉄道駅から博覧会会場、百貨店に至るまで、巨大ガラス建築が登場した。先陣を切ったのが温室であり、その建築技術や形態が、1851年万国博覧会会場となった水晶宮（Crystal Palace）をはじめ、都市の公共建築物に受け継がれていった。19世紀に温室がその他のガラス建築に先駆けて建設された経緯は、どのようなものであったのか。また、それはその時代の都市環境にいかなる新空間を提供したのであろうか。

19世紀の温室については、これまで建築史の分野で研究されてきた²⁾。温室と水晶宮との関連についても、ロンドン万国博覧会をめぐる論考の中で、その建築的類似性に主な関心が向けられている³⁾。最新の研究では、イソベル・アームストロング（Isobel Armstrong）によるヴィクトリア朝のガラスに関する著作において、温室についての分析がある⁴⁾。しかし、19世紀に温室が爆発的な流行を見た理由を建築的観点のみで説明するの

は、温室が植物栽培という目的を持った建築物だったことを勘案すると、十分とは言い難い。本稿は、19世紀における温室の社会的意義を、建築的要素を捨象しつつ、植物を中心とした内部スペースに着目しながら論じることを主眼とする。温室が一連のガラス建築に先駆けて都市に誕生した経緯を記述しながら、それが社会にどのように受容され、結果的に水晶宮のような大型ガラス建築の流行に向けていかなる役割を果たしたのかについて考察したい。

資料としては、パーム・ハウス建設に関する一次史料ばかりでなく、当時出版されたガイドブックや、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』（*The Illustrated London News*, 以下 *ILN*）のような定期刊行物の記事を用いて論じることとする。

1. 19世紀における温室発展の背景

温室は、19世紀を通じてイギリスのみならずヨーロッパで大流行したが、温室自体は19世紀以前にも存在した。しかしながら、当時は技術的問題やガラスという素材の希少性から、ガラス張り温室を建設するまでには至らなかった⁵⁾。18世紀までの温室はオランジュリー（Orangerie）と呼ばれるもので、イギリスの厳しい冬に育成するのが困難なかんぎつ類の果物を当該温室で栽培した。温室は、貴族のカントリーハウスやその庭園に付随する形で作られることが多く、貴族の庭造りと同様に個人の道楽的嗜好の強いものであった⁶⁾。

19世紀になると、技術の発展とガラス税の廃止によって暖房設備の整った巨大温室の建設が可能になった。また、この時代には温室建設を推進する必然的理由も生まれた。というのも、資本主

義の世界規模的發展と植民地の拡大に伴って、熱帯植物が大量にイギリスにもたらされるようになったからである⁷⁾。プラントハンターと呼ばれる植物収集家たちが、世界中を駆け巡り、異国のめずらしい植物をイギリス本国に持ち帰った。それら熱帯植物の存在は、植物学の発展に多に寄与した。熱帯植物は背丈の高いものが多いことから、建物は巨大化し、また、その育成には一年中、日光と温度を必要とするため、ガラス張りで暖房設備が完備した温室の建設が進められたのである⁸⁾。

19世紀、大型ガラス温室内で育成された熱帯植物のなかで、その象徴とも言えるのがヤシであり、その栽培は19世紀のヨーロッパで大流行した。ヤシはその外見から、植物界で最も威厳のある崇高なものとして見られていた。他の樹々とは明らかに異なり、背丈や茎や葉の形状の珍しさと優美さから、「植物相の王子」と言われた⁹⁾。また、外見だけでなく、その実用性も重宝された。ヤシは食用のほか、薬用、園芸用、資材等々として利用され、その利用価値ゆえに珍重されたのである¹⁰⁾。さらに、遠く離れた異国の地に生息するエキゾチックな熱帯植物をヨーロッパへ持ち帰って栽培すること自体が大きな夢であり、この時代、各国が競って多様な種類のヤシの収集と栽培に挑戦したのである¹¹⁾。

18世紀までの温室が貴族の道楽だったのに対し、19世紀の温室には異国の植物を収集し、育成して研究するという明確な目標が付随した。19世紀に入ってから最初の40年間ほどは、温室は貴族のカントリーハウスに付設されることが多かったものの、植物採取および研究という側面が目立つようになった。とりわけ名高いのが、現存しているサイオン・ハウス (Syon House) の温室や、現存していないが、植物学への貢献でヨーロッパ中にその名を轟かせたチャッツワース・ハウス (Chatsworth House) の大温室 (Great Conservatory) やヴィクトリア・レジア・ハウス (The Victoria Regia House) である。後二者は、庭園および温室設計家のジョセフ・パクストン (Joseph Paxton) が建造し、後に彼自身がデザインした水

晶宮の原型になったことで知られている。

1840年代以降になると、温室設計は個人ではなく、植物協会のような団体によるものへと転換した。19世紀は植物学の隆盛とともに、イギリス各地で植物園の設置が相次いだ。最も有名だったのが、ロンドン園芸協会 (The Horticultural Society of London) 付属の植物園、王立植物協会 (Royal Botanic Society) 設置の植物園およびキュー植物園等であり、いずれもロンドンにあった。前二者はそれぞれ、1804年と1838年に設立された私的学術団体に属する私的空間であり¹²⁾、後者は、18世紀後半に王室の植物園として出発したが、1840年に王室から政府へと管理移管され、世界的に有名な植物研究センターとなった。

これらの植物園の間には、1840年代以降、主導権を巡って熾烈なライバル関係が醸成された。特に、王立植物協会とキュー植物園の間のそれは激しいもので、その競争意識の現れが、それぞれが目玉として設置した温室、すなわち、ウィンター・ガーデン (Winter Garden) とパーム・ハウスであった。どちらも高名な建築家デシムス・バートン (Decimus Burton) と技師リチャード・ターナー (Richard Turner) のコンビによって設計されたにもかかわらず、その規模、デザイン、建設時期のどれをとっても、強いライバル心を見ることができ¹³⁾。

いずれの温室も、管轄の違いはあれども、個人ではなく団体によって設置された温室の最も初期の例である。その後、これらを手本にして、全国的に団体による温室が設置されてゆく¹⁴⁾。

2. パーム・ハウス——科学研究機関から教育的娯楽空間への変容

キュー植物園が国家施設となった際、園長に任命されたのが植物学者であり、プラントハンターとしての経験もあるウィリアム・フッカー (William Hooker, 1785–1865) である¹⁵⁾。彼は同園の設置目的について、著名な植物学者ジョン・リンドリー (John Lindley) の助言を引用しながら、何度も版を重ねた自身のガイドブックに、熱帯植物を中心に外国種の植物をできる限り集めるこ

と、内外の植物園に対して指導的立場に立つこと、植民地における植物流通の中心的役割を果たすことなどと記載している¹⁶⁾。実際、南米からもたらされたキナノキは、フッカーによる改良を経て、植民地に移植された¹⁷⁾。この移植方法は、19世紀後半に、サトウキビ、ココア、茶、コーヒー、ヤシ油、ゴム等の植物に応用され、植民地の大型園でおおむね成功をみた。この快挙については、キュー植物園の存在がとりわけ与って力があったと言える¹⁸⁾。同植物園は、19世紀半ば以降、帝国主義的傾向を強めながら、科学としての植物研究を拡大させ、ヨーロッパ随一の植物園へと急成長した。

パーム・ハウスは、1848年に完成したヤシ栽培温室であり、フッカー自身が「当園の栄光」(“the glory of the Gardens”)¹⁹⁾と称するほど重要な施設であった。その名声および規模は、当時、国内最大級を誇った。ヨーロッパにおけるヤシの価値は前述のとおりであるが、当時、世界中で1,000種ほど存在するとされたヤシのうち、この温室には100種近くも集められた。植物研究のためには、多様な種類のヤシを集積することが必須であると考えられたからである。また、ここではヤシ以外にも外見的に美しく、かつ実用的価値がある植物が栽培された。例えば、バナナやマンゴー、ペアー、イチジク等の果樹木、コーヒーやカカオ、シナモン等の食用樹、さらに、ソテツ、ポポー、キャッサバ、インディゴ、リュウケツジュ、ベンガル菩提樹、タンギニア・ベネニフェーラ、アリストロキア・ギガンテア等の珍奇な植物であり、その多様性は明らかである。これらの植物は、全て、種類ごとに配置されていた²⁰⁾。

前述のフッカーによるガイドブックには、植物園の全植物が施設別に掲載され、その種類や原産国について説明が附されている。全植物の百科事典とも言えるもので、とりわけ充実しているのがパーム・ハウスの項目である。このことから、この温室は「百科事典的空間」(“an encyclopedic space”)²¹⁾、科学研究を中核とする施設だったことが分かる。

このような多様な植物で構成された温室内部

は、熱帯世界の再現となっていた。ここでは、巨大スペースの大半を占めるのが植物、しかも、見慣れた植物とは全く異なる熱帯性植物である。作者不詳のキュー植物園ガイドブックは、次のように描写している。

そこにあるもの全て、樹木状のシダの優美な葉、その向こうに見える樹木や植物の茎、とりわけ、熱帯性気候をよく表している幅がある葉、それら全てが調和していた²²⁾。

これを読むと、シダの葉や樹々の茎、植物等で埋め尽くされた躍動感あふれる熱帯の光景や、その気候まで感じ取れるような空間となっていることが窺える。フィリップ・ヘンリー・ゴス(Phillip Henry Gosse)によるガイドブックでも、その内部は「熱帯林」²³⁾に喩えられ、そこでの熱帯体験は次のように述べられている。

熱帯地方の景色の美観を見る機会に恵まれた人々は、……この回廊に寄りかかりながら、そのすばらしい光景をまざまざと思い返すことであろう。……そして、ヨーロッパから一度も出たことのない人は、ここで目にしたことからその灼熱の地についての概念を形成するだろう²⁴⁾。

これらの記述に表されているのは、いずれも非日常空間であり、パーム・ハウスは現実の熱帯林を模倣しているということである。言い換えれば、ヨーロッパとは完全に異なった別世界の熱帯地方をその植物、気候、概念ごとそのまま取り入れた熱帯林という形で創造しようとしたと言える。多様な植物で構成された熱帯林とガイドブックの百科事典的要素は、あたかも世界地図上、植民地を赤く塗りつぶしていく行為に通底するものがある。すなわち、植物研究のために世界各国からここに集められたあらゆる植物は、帝国主義的権力を誇示する役割も果たした。科学としての植物学を国の利益のために拡大させ、それを内外に誇示した場所がパーム・ハウスだったと言えるのである。

しかしながら、キュー植物園にはこのような帝国の附属科学機関とは別の側面もあった。すなわち、同時に国立機関でもあったという点である。当該園は、1840年に王室から政府へと移管されたが、それは、植物園の運営に国民の税金が使われること、したがって、一般公開が必須であることを意味する。この植物園が、ロンドン園芸協会や王立植物協会付属の植物園と決定的に異なっていたのは、リチャード・ドレイトン (Richard Drayton) が力説するように、それが植物研究施設でありながら、1840年以降は、誰もが無料で入園できる「公共庭園」(public garden)であった点である²⁵⁾。ここには園長たるフッカーの語り尽くせない葛藤が存在したであろうことは想像に難くない。帝国植物園の推進を目指した彼にとって、その大衆化は快く受け入れられるものではなかった。しかし、レイ・デズモンド (Ray Desmond) が述べるように、フッカーは、一般への配慮から、公共施設としてのさらなる整備を余儀なくされたのである²⁶⁾。

当該園における大衆化の背景には、19世紀半ばに労働者向けの娯楽に対する新しい考え方が生まれたことがある²⁷⁾。1840年代以降、労働者たちが余暇時間をアルコールや低俗な余興に費やすことを防止し、彼らのモラルを向上させるために、文化的で教育的な娯楽を提供しようという議論がなされた。既存の施設である博物館や美術館、図書館において、上流や中流階級だけでなく、その他の階級にも利用を許可する動きが出てきた。また、同時期に公園 (public parks) なるものが誕生したもの、同じ理由からである。

このような事情から、国立機関であるキュー植物園の公共化が加速したのである。フッカーは一般人を惹きつけるような庭園づくりを行い、彼らのための教育的レクリエーションを推進した。これは、大衆の人気を獲得し、植物園の将来を安定化するために必要不可欠な政策であった²⁸⁾。

科学的記述を目指した前述のフッカーのガイドブックにも、“public”という言葉が多様され、一般人を意識した表現が散見される²⁹⁾。特に、彼は植物園の役割を「一般人に役立つような、非常に

ポピュラーだが科学的な施設」(“a great popular yet scientific establishment, for the advantage of the public”)³⁰⁾と述べており、大衆向けかつ科学的施設の整備を謳っている。この記述を、パーム・ハウス完成前の1847年に出版された同ガイドブックの初版の記述と比べてみると、初版では、「一般人に役立つような、非常に科学的な施設」(“a great scientific establishment, for the advantage of the public”)となっている³¹⁾。つまり、後の版では初版にはなかった“popular”の一言が付け加えられている。世論の要求に応じて、フッカーが科学施設を娯楽施設に応用させようとした苦勞がしのばれる。

こうして、植物研究の最重要拠点であるパーム・ハウスは、一般人へのレクリエーションという役割を担うこととなった。科学施設から教育的娯楽施設への変容を *ILN* に掲載された2つの記事を比較することでさらに深く読み取ることができる。パーム・ハウスが完成し、一般公開された直後に出版された1848年の記事では、完成したばかりのパーム・ハウスの大きさや形状、建築材質等について触れながら、その外観 (図1) と内観 (図2) の様子を詳細に描写している³²⁾。外観は、全長362フィート (約110メートル) であり、中央部は66フィート (約20メートル) の高さである。鉄、石、レンガ、そして大量のガラスで建築されており、暖房設備に工夫がされている旨が述べられている。パーム・ハウスがキュー植物園の中心的存在として建設されたことは、その大きさや形状の優位性からだけでなく、その建設場所からも明らかである。テラスを伴った当該建築物を起点として放射状に、概ね同じ距離の「3つのヴィスタ」(見通し)³³⁾が形成されている。1つ目は、キュー植物園の目玉の一つであるパゴダ風の塔 (pagoda) への直線道路、2つ目はテムズ川対岸に位置する前述のカントリーハウスであるサイオン・ハウスへと続く道路、そして、3つ目はこれもまたテムズ川対岸のブレントフォード (Brentford) という地域を見渡することができる直線道路である。さらに、パーム・ハウスの反対側正面の向かいには美しい湖が位置しており、当該

図1 パーム・ハウスの外観（1848）

出典： *The Illustrated London News*, 2 September, 1848.

図2 パーム・ハウスの内観（1848）

出典： *The Illustrated London News*, 2 September, 1848.

園でもっとも風光明媚な場所の1つである。単に科学研究施設としての重要性というだけであれば、ヴィスタを伴った絶好のロケーションに置く必要はない。わざわざ複数のヴィスタをもってレイアウトしているということは、当該施設の本来の目的を超えて、当園への来訪者たちへのサービ

スととらえるべきであろう。すなわち、一般人たちが、当園内の散策を楽しむ際のメインスポットとしても整備されたと言える。

さらに、内観については、中央部に地面と天井のおおよそ中間部分に内壁に沿うようにギャラリーが張り巡らされ、そこまで螺旋階段が続いてい

る様子が描写されている³⁴⁾。人々は、このギャラリーにより、下からだけでなく上から鳥瞰的に植物を見下ろすことができるため、植物観察という科学的目的に適した構造になっている。記事に添えられた内観の図(図2)を見ると、中央に螺旋階段、そして、その奥にギャラリーを見てとることができる。中は空洞で、鉢植えの植物がまだ少ししか運び込まれておらず、完成直後であることが一見して判る。記事では、古くなった別の温室から、ヤシ科の植物を随時運んでくるとの説明があり、今後、この空間がそれら熱帯植物で満たされるであろうことが予想できる。すでにそれらの業務を行っている作業員たちが中央右寄りに何人かおり、それ以外は、完成直後の温室内を見学し、散策している一般人である。ギャラリーから見下ろしている人々、作業を見守っている親子、壁際に置かれた植物の鉢を見ている男女、そのほか、グループになっている人々も描写されており、教育的娯楽施設として整備されていくであろうことが想像できる。

それから若干年を経た1852年の*ILN*の記事では、パーム・ハウスは「熱帯林」(“a tropical forest”)と表現され、温室全体にヤシを中心とした樹々が鬱蒼と生い茂るさまが描写されている(図3)³⁵⁾。パーム・ハウス内の植物は鉢植えが多いため、前回の記事から3年ほどの間に、多くのヤシ科植物が運び込まれ、当該温室の整備は一気に進んでいることが分かる。前回同様、ギャラリーから見下ろす人々も描かれているが、地上にいる人々は、植物を見ているというよりは、植物のある空間を談笑しながら散策しているようである。いずれにせよ、ギャラリー上の人間も、地面の人間も、明らかに植物研究者たちではなく、女性や子どもを含んだ一般人の一行が熱帯林を散策する様子は歴然としている。数年のうちに、散策および社交等の娯楽施設としての側面が進んだと考えるのが自然であろう。

キュー植物園の来園者数を見る限り、同温室における教育的娯楽空間が果たした役割は大きい。植物園が一般公開された翌年の来園者は9,174人であり、その後、徐々にしかその数は増加しなかつ

たが、ロンドンから植物園近くのリッチモンドまで鉄道が開通した1846年に46,573人となり、パーム・ハウスがオープンした1848年は91,708人に達した³⁶⁾。来園者数の増加に鉄道開通が果たした影響は多大であるが、同温室による影響はそれ以上と言えるものであった。このように帝国の重要科学施設として出発したパーム・ハウスは、大衆を対象とした教育的娯楽空間として19世紀半ば以降に一時代を築くこととなった。

3. 温室の社会的意義

温室の当初の役割は、19世紀における帝国主義によって大量にもたらされた熱帯植物の育成にあった。ところが、このような膨大な種類の植物を新しい建築素材のガラスで囲む空間は、温室に付加価値を与えた。陽光はガラスに跳ね返って燦然と輝き、熱気は建物内にみなぎり、エキゾチックな光景と香ばしい匂いが訪れる人々を魅了するなど、視覚、嗅覚、聴覚、皮膚感覚を刺激する別世界を形成していた。このような内部スペースは、レクリエーションに欠かせない条件を十分に担っていた。

ここに至って、温室内での逍遥や社交、娯楽の機会が、19世紀半ばの社会で、一般人に向けて整備されるようになった。ロンドン園芸協会や王立植物協会の植物園および温室が貴族や上流階級にしか開かれていなかったのに対して、国家施設であるパーム・ハウスは中流より下の階級の者にも開放されており、教育的娯楽の機会が一般人に与えられるようになったのである。

このような教育的娯楽のあり方が、1851年万国博覧会の水晶宮(図4)に多大な影響を与えることになったと考えられる。水晶宮の設計に際して、設計者のパクストンがチャッツワースでの温室技術を応用させたことは前述のとおりであり、それは、建設開始直前の1850年11月中旬に掲載された*ILN*の記事で、彼自身がチャッツワースのヴィクトリア・レジア・ハウスの外観と内観を示しながら、博覧会会場の「ミニチュア版とみなされるかもしれない」と言及していることから明らかである³⁷⁾。しかし、温室と水晶宮の関連性に

図3 パーム・ハウスの内観（1852）

出典：The Illustrated London News, 7 August, 1852.

ついで、さらに、もう少しだけ遡ることができる。それより4ヵ月前の7月6日のILN誌上で、パクストンは、まだ王立委員会の最終決定を経ない段階で、彼自身の設計案を初めて世間に披露したが、その際、彼のデザインしたガラスの建築物と「温室」との類似性を示唆している³⁸⁾。同記事において、パクストンは万国博覧会終了後の会場跡地利用方法にも言及し、水晶宮の建物を「ウィンター・ガーデン、もしくは、巨大な園芸建造物」（“a winter garden or a vast horticultural structure”）として転用することを掲げている³⁹⁾。すなわち、社交を目的とした馬車道や遊歩道の設置と植物育成設備の整備を行うことを提案しているのである。これはまさに「温室」の持つ教育的娯楽的価値である。ここからも、水晶宮が温室としての機能を内包するものであったことが自明である。

水晶宮が国民の人気を短期間で勝ち得たのは、

図4 水晶宮の内観（1851）

出典：The Illustrated London News, 25 January, 1851.

決してその建築的要素や目新しさばかりに認められるものではない。むしろ、パクストンが温室技術を応用した設計案を提示した時、人々が「温室」なるものがどのようなものなのかを認識していたことが重要である。当時ロンドンで有名な「温室」と言えば、前述のロンドン園芸協会所属の温室、および王立植物協会のもの、そして、キュー植物園のパーム・ハウスであった。とりわけ、後者は前二者とは異なり、一般人にも開かれていたため、ロンドン郊外に位置するというアクセスの悪さにもかかわらず、広く知られていた施設であった。パーム・ハウスの植物とガラスで構成された空間が社交やレクリエーションなどに利用され始めていたからこそ、水晶宮もまた人々に受け入れられたと考えられるであろう。

ジェフリー・アウエルバッハ（Jeffrey Auerbach）が指摘するように、水晶宮は他階級に属する者同士が積極的に交流する場所ではなかったが、労働

者階級を排除することはなく全ての階級に開かれ、それぞれの階級に適した楽しみ方を提供したのであり⁴⁰⁾、その意味では、パブリック・スペースであった。それは、1840年、キュー植物園が国家施設となって以降に建設されたパーム・ハウスが、従来、上流階級のみにも与えられた温室での社交や娯楽という特権を一般人にまで適用させたことの延長線上にあると考えられる。

新妻昭夫は、王立植物協会のウィンター・ガーデンやキュー植物園のパーム・ハウスは「植物学という目的が明確で娯楽性はあまりなかった」と述べ、イギリスで「公共娯楽施設」としての温室が発展したのは、万国博覧会以降であると結論づけている⁴¹⁾。確かに、万国博覧会の会期中に、キュー植物園への来園者が増えたことは事実であり、パーム・ハウスの教育的娯楽空間としての要素が、万国博覧会後により一層高まったことは否定できない。前述の1852年のパーム・ハウス内部の様子を描写した *ILN* の記事も、万国博覧会後のことである。しかし、先に示したとおり、教育的娯楽施設の軌跡はすでに、パーム・ハウス完成直後から始まっていたと見る方が事実に近いように思われる。

ところで、1851年5月の開会から、開催期間である半年の間に、会場跡地利用問題が再燃したが、そこでも、温室の公共娯楽空間としての側面が強調されている。もともと、パクストンは、前述のとおり、開会前から、会場跡地として、「ウィンター・ガーデン、もしくは、巨大な園芸建造物」の利用を考えていたが、王立委員会により、会場は閉会後に取り壊すことが決定していた。それを不服としたパクストンは、開会后、すぐに、水晶宮をハイド・パーク (Hyde Park) 内に残すために奔走した。いかに、会場保存が地域社会や国民にとって利益になるかを訴えたパンフレットを作成したり、議会へ誓願書を提出したりした⁴²⁾。その中で、パクストンは、ウィンター・ガーデンのようないわゆる教育的娯楽施設は現在までのところイギリスには存在せず、したがって、そのような施設をハイド・パークに保存することの重要性を切々と訴えている。しかし、例外とし

て、キュー植物園のパーム・ハウスは、「毎日、多くの人々が集まる」空間であると述べており、そのような施設として、水晶宮を保存することを力説している⁴³⁾。ここから、彼自身がパーム・ハウスの教育や社交としての側面を重視していることは明白である。さらに、彼の請願を受けて、議会だけでなく、新聞や雑誌上でも跡地問題が大々的に議論され、賛成意見から反対意見まで幅広く出されたが、そこでも、キュー植物園のレクリエーション施設としての側面が広く認識されていた。たとえば、ある批評家は、「大衆は花々や植物の間を散策することを熱望するだろう。……そのような施設はキュー植物園やチジック (Chiswick)、リージェンツ・パーク (Regent's Park) にある」としている⁴⁴⁾。後二者は、それぞれ、ロンドン園芸協会と王立植物協会の植物園があった場所である。ここからもキュー植物園等の社交の側面が全面に押し出されているのが見てとれる。この批評家はさらに続けて、万国博覧会後の水晶宮は、「さまざまな公共の目的、たとえば、定期的な展示会」のために利用されるのがよいと提案している⁴⁵⁾。以上のように、パーム・ハウスをはじめ温室の教育的娯楽の側面は世間一般に流布しており、それが、水晶宮の公共施設としての側面に受け継がれていったと言える。とりわけ、これらの温室の中で、一般開放されていたものといえば、パーム・ハウスだけであるから、当該温室こそが、ガラス建築物としてのパブリック・スペースの萌芽と見てよさそうである。なお、水晶宮は万国博覧会終了後、解体され、1854年、ロンドン郊外に移築された。1936年、火事で消滅し、現在は地名として残っているのみである。

おわりに

かつては、植物を育成する楽しみは特権階級のものであり、そのような植物を配置した庭園や植物園もまたエリートのみに許された娯楽空間であった。それが、19世紀半ばにおいて、パーム・ハウスに見られるように、一般人が知的エンターテイメントに触れることができる新空間が都市に整備され始め、それらが、水晶宮のようなパブリ

ック・スペースへと受け継がれていった。こういう事実からも現代につながる歴史の歩みが読み取れるのである。

付記

本稿は、日本英文学会中部支部第64回大会（2012年10月27日、南山大学）における口頭発表原稿の一部に加筆・修正を施したものである。

注

- 1) キュー植物園の現在については、<https://www.kew.org/>を参照。
- 2) John Hix, *The Glasshouse* (1996, London: Phaidon, 2005); George Kohlmaier and Barna von Sartory, *Houses of Glass: A Nineteenth-Century Building Type* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1981); Stefan Koppelkamm, *Glasshouses and Wintergardens of the Nineteenth Century* (London: Granada, 1982).
- 3) Jeffrey Auerbach, *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display* (New Haven and London: Yale UP, 1999); Hermione Hobhouse, *The Crystal Palace and the Great Exhibition: Art, Science and Productive Industry, A History of the Royal Commission for the Exhibition of 1851* (New York: Continuum, 2002).
- 4) Isobel Armstrong, *Victorian Glassworlds: Glass Culture and the Imagination 1830–1880* (Oxford: Oxford UP, 2008) pp. 141–203.
- 5) Hix, *op. cit.*, p. 130.
- 6) Koppelkamm, *op. cit.*, p. 15.
- 7) Kohlmaier, *op. cit.*, p. 49.
- 8) Koppelkamm, *op. cit.*, p. 16. なお、19世紀のプラントハンターについては、白幡洋三郎『プラントハンター』（1994年、講談社、2005年）pp. 21–51を参照。
- 9) Kohlmaier, *op. cit.*, p. 49.
- 10) *Ibid.*
- 11) Koppelkamm, *op. cit.*, p. 16.
- 12) Hix, *op. cit.*, pp. 136–49. なお、ロンドン園芸協会は、王立園芸協会（Royal Horticultural Society）として存続しているが、王立植物協会は、1930年代に消滅した。温室はいずれも現存していない。
- 13) *Ibid.*, pp. 142–43.
- 14) 植物学協会は19世紀を通して、地方都市にも設置されたが、それらの付属植物園の多くには温室が併設された。
- 15) フッカーは亡くなる1865年まで、園長として活躍した。彼の後を継いで同年に園長になったのは息子のジョゼフ・フッカー（Joseph Hooker, 1817–

1911）である。

- 16) William Hooker, *Kew Gardens; or a Popular Guide to the Royal Botanic Gardens of Kew*, 9th ed. (1847, London: Longman, 1851) pp. 11–12. フッカーのガイドブックは1847年に出され、その後何度か改訂された。本稿では、パーム・ハウスについての記述を分析するために、その建設後に出版された1851年度版（第9刷）を用いることとする。
- 17) Richard Drayton, *Nature's Government: Science, Imperial Britain, and the 'Improvement' of the World* (New Haven, CT: Yale UP, 2000) p. 207–10.
- 18) *Ibid.*, p. xiii; Jim Endersby, *Imperial Nature: Joseph Hooker and the Practices of Victorian Science* (Chicago and London: Chicago UP, 2008) p. 308.
- 19) Hooker, *op. cit.*, p. 18.
- 20) *Ibid.*, pp. 21–32.
- 21) アームストロングは、サリー・ガーデン（Surrey Gardens）における動物園について、あらゆる国々の動物を一つの空間に内包しようとする点を“an encyclopedic space”と称している。Armstrong, *op. cit.*, p. 146. 当該パーム・ハウスはその植物版と言えるであろう。
- 22) *Kew Gardens with the Pleasure Grounds and Park, Hand-Book Guide for Visitors*, 5th ed. (London: H. G. Clarke, 1852) p. 20.
- 23) Philip Henry Gosse, *Wanderings through the Conservatories at Kew* (London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1857) p. 46.
- 24) *Ibid.*, p. 95.
- 25) Drayton, *op. cit.*, p. 180.
- 26) Ray Desmond, *The History of the Royal Botanic Gardens Kew* (London: Harvill Press, 1995) pp. 167–68.
- 27) Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution 1780–1880* (New York: St. Martin's Press, 1980) pp. 90–107.
- 28) Drayton, *op. cit.*, pp. 180–92. この傾向は、フッカーの息子ジョゼフの時代になるとさらに顕著になり、開園日時の延長を求める議論が国会でなされた。Endersby, *op. cit.*, pp. 276–310.
- 29) Hooker, *op. cit.*, pp. 3, 7, 10, 12.
- 30) *Ibid.*, p. 10.
- 31) Hooker, *Kew Gardens*, 1st ed. (1847) p. 6.
- 32) *ILN*, 2 September 1848, pp. 132–34.
- 33) *Ibid.*, p. 134.
- 34) *Ibid.*, p. 133.
- 35) *ILN*, 7 August 1852, p. 97.
- 36) Desmond, *op. cit.*, pp. 390–91.
- 37) *ILN*, 16 November 1850, p. 385. なお、実際の建築

は、よく知られているように、プレハブ工法を用いたため、わずか9ヵ月で完了した。

38) *ILN*, 6 July 1850, p. 18.

39) *Ibid.*

40) Auerbach, *op. cit.*, pp. 154–58.

41) 新妻昭夫「英国の温室の歴史と椰子のイメージ」『園芸文化』第1号(2004): p. 25. 新妻は、温室の公共娯楽としての性格に着目しているが、その発展時期についての見解は筆者とは異なる。また、コッペルカムもパーム・ハウスの公共的娯楽としての側面について簡単に触れている。Koppelkamm, *op. cit.*, p. 29.

42) Joseph Paxton, *What is to Become of the Crystal Palace?* (London: Bradbury & Evans, 1851).

43) *Ibid.*, p. 8.

44) *The Literary Gazette*, 28 June 1851, p. 437.

45) *Ibid.*

参考文献

Armstrong, Isobel. *Victorian Glassworlds: Glass Culture and the Imagination 1830–1880*. Oxford: Oxford UP, 2008.

Auerbach, Jeffrey. *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*. New Haven and London: Yale UP, 1999.

Colquhoun, Kate. *A Thing in Disguise: The Visionary Life of Joseph Paxton*. London: Harper Perennial, 2004.

Cunningham, Hugh. *Leisure in the Industrial Revolution 1780–1880*. New York: St. Martin's Press, 1980.

Desmond, Ray. *The History of the Royal Botanic Gardens Kew*. London: Harvill Press, 1995.

Drayton, Richard. *Nature's Government: Science, Imperial Britain, and the 'Improvement' of the World*. New Haven, CT: Yale UP, 2000.

Driver, Felix, and Luciana Martins, eds. *Tropical Visions in an Age of Empire*. Chicago: Chicago UP, 2005.

Endersby, Jim. *Imperial Nature: Joseph Hooker and the Practices of Victorian Science*. Chicago and London: Chicago UP, 2008.

Gosse, Philip Henry. *Wanderings through the Conservatories at Kew*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1857.

Hix, John. *The Glasshouse*. 1996. London: Phaidon, 2005.

Hobhouse, Hermione. *The Crystal Palace and the Great Exhibition: Art, Science and Productive Industry, A History of the Royal Commission for the Exhibition of 1851*. New York: Continuum, 2002.

Hooker, William. *Kew Gardens; or a Popular Guide to the Royal Botanic Gardens of Kew*. 9th ed. 1847. London: Longman, 1851.

The Illustrated London News.

Kew Gardens with the Pleasure Grounds and Park, Handbook Guide for Visitors. 5th ed. London: H. G. Clarke, 1852.

Kohlmaier, George and Barna von Sartory. *Houses of Glass: A Nineteenth-Century Building Type*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1981.

Koppelkamm, Stefan. *Glasshouses and Wintergardens of the Nineteenth Century*. London: Granada, 1982.

Paxton, Joseph. *What is to Become of the Crystal Palace?* London: Bradbury & Evans, 1851.

The Literary Gazette, 28 June 1851.

白幡洋三郎『プラントハンター』, 1994年, 講談社, 2005年.

新妻昭夫「英国の温室の歴史と椰子のイメージ」『園芸文化』第1号(2004): pp. 16–39.